



梅津貴昶

創流三十五周年 古希

第十六回 梅津貴昶の会



坂東巳之助



中村勘九郎

見どころと解説

うらかな春三月、待望久しかった「梅津貴昶の会」が歌舞伎座の檜舞台に復活します。「創流三十五周年記念」となる今回の演目は、貴昶の代表作である『京鹿子娘道成寺』とおめでたい『万歳』の二本立て。古希を迎えた貴昶の円熟の舞台にご期待ください。

長竹 唄本 「京鹿子娘道成寺」

春といえば桜、桜といえば『京鹿子娘道成寺』。あまねく親しまれた歌舞伎舞踊の代表作であり、また随一の大曲です。

恋に破れた女が、大蛇の姿となつて男の隠れた釣鐘に巻き付き、鐘ごと焼き尽くしたという、紀州(和歌山県)の道成寺に伝わる道成寺伝説。この説話をもとに、恋を知り初めた娘の心ときめきと憂愁を、のどかな春景色に包んで描き尽くすという、万人に愛されるイメージに到達したのが『京鹿子娘道成寺』の世界です。

道成寺の釣鐘が再興された日に、鐘への恨みを宿した女の亡霊が白拍子(女芸人)の姿で現れる、という設定は、能の『道成寺』から受け継いだものですが、『京鹿子娘道成寺』では、白拍子が舞を披露するという名目で、華麗な芸尽くしが展開します。しかも、白拍子とはいいなから、『娘道成寺』という題名にも示されているとおり、うきうきと愛らしい町娘の雰囲気を重ね合わせているところに、近世の歌舞伎舞踊らしい特色があります。

冒頭は、満開の桜のなかを、白拍子が道成寺へと急ぐ風情ある姿を描いた「道行」。続いて、独特の足使いを見せる「乱拍子」や「急の舞」など、

竹本 「万歳」

大曲『京鹿子娘道成寺』を心ゆくまで堪能していただいたあとは、『万歳』で晴れやかに締め括ります。

万歳というのは、正月に家々を回った門付け芸人です。関東では三河万歳、尾張万歳が有名ですが、京都の町に来たのは大和万歳。宮中に召される者も多くあつたといわれますが、町家を回る万歳は、ふつう太夫と才蔵の二人組で、才蔵は鼓を打ち鳴らし、それに合わせて太夫が祝福の言葉を賑やかに唱えるというものでした。

関西の三味線音楽である地歌にも『万歳』という曲がありますが、今回は竹本(義太夫節)の曲が使われます。これは人形浄瑠璃(文楽)

能から写した芸を演じますが、あとは純粋の歌舞伎舞踊となります。鞆唄に乗った手踊り、花笠の踊り、手拭を使ったクドキ、鞆鼓(雅楽で使う鼓)の踊り、可憐な手踊り、鈴太鼓の踊り…と、次々と持ち物を変え、味わいの異なる舞踊が繰り広げられていくなかに、女方舞踊のあらゆる技法が含まれているといわれています。

梅津貴昶が七歳の初舞台の折、自身の強い希望で踊ったのが、この『京鹿子娘道成寺』。昭和六十年、歌舞伎座における第一回「梅津貴昶の会」の演目にもなり、以来、第四回(梅津流十周年記念)では昼の部、夜の部共に、第十三回(建て替え前の歌舞伎座での最後の会)、第十四回(現在の歌舞伎座での最初の会)と、節目ごとに演じ重ねて来ましたが、歌舞伎座での『娘道成寺』は、歌舞伎俳優でさえ、誰でも踊ることが出来るという作品ではありません。しかも、貴昶の『娘道成寺』は、素踊りの形で、それぞれの踊りの色合いを演じ分けるといって、前人未到の境地を築き上げてきました。とりわけ今回は、「二世一代」の決意を秘めてのぞみます。しかも、公演は「一夜限り。まさに、一期一会」という言葉のとおり、永く記憶にとどめておきたい必見の舞台です。

『花競四季寿』という、四曲編成の景事、つまり舞踊的な演目のなかの「春」に相当する場面。初春をことほぐ言葉にはじまり、「えびす舞」や「京の町」など、大和万歳の万歳歌を連ねた地歌の『万歳』の詞章を流用して、繁栄と長寿を祝すという内容です。

今回は、三人立ちの形で上演されますが、共演者の中村勘九郎、坂東巳之助は、言うまでもなく、故中村勘三郎と故坂東三津五郎の長男。同じ時代をともに歩んだ芸の友を偲びつつ、美しい日本の伝統芸を明日につなげる思いをこめた、すがすがしい舞台が大いに期待されます。